

---

# うたかた その2

ほんま ぶんこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うたかた その2

### 【Nコード】

N5423V

### 【作者名】

ほんま ぶんこ

### 【あらすじ】

大方の計画を話し込んでいると、目の前の跳び箱がパカッと開いた。

「すべて聞かせてもらったぞ。上野、西里」

(その1より)

僕がつぶやくと谷川は持ち上げた跳び箱の上面部を閉じ再び中に隠れた。

と思つたら3段目辺りから指が見えて再びパカッと開き跳び箱の中から出てきた。

「めんどくせつ！」

谷川の毒にも薬にもならない動きを見届けた後、僕はメタルフレームの眼鏡を外し空にかざした。

汚れが目立つが鰯雲はアートだった。

取り敢えず汚れを落とそう、と青ジャージの上着の裾で眼鏡を拭いていると、谷川は、長い手足を折り曲げ無言で僕の隣に座った。

当たり前のように。

相変わらず前髪長いしポーカーフェイスだ、と谷川の心の淵を垣間見ると、西里は谷川の行いがツボだったのか涙を流して笑っている。

僕はそんな谷川と、そんな谷川を笑う西里に挟まれた。

少し嫌な気分だ。

だが黙っていたら運動マットに3人の男子が体育座りをしているだけだ。

無言で。

もつと嫌な気分になるので苦々しく谷川に話しかけた。

「おまえ、いつから跳び箱の中にいたんだよ」

「昼休み開始からだ。まあ、私のデトックスだな」

整った顔を崩さず谷川は、ムフフと笑う。中坊なのに、「私」とか「ムフフ」とか相変わらずオッサンみたいだ。まあ僕も人の事は言えないが。

「デトックスって、おまえ自身が毒みたいなもんだろが」

「やだなあ上野くん。そんなに賞賛するなよ」

「してねえよ」

不快感丸出しで応じるが、いつもながら谷川には通じない。

「それよりさっきの、とある計画の話だが聞かせてもらったよ。と  
いうことで、私も仲間に入れてはくれまいか」

「隠密みたいな真似をして、なんで仲間に入れなきゃなんないんだ  
よ」

なー、と僕は西里と顔を見合せた。

「それにおまえ、アイツと連んでるじゃん」

うんうん、と西里は隣でうなずく。

アイツとは、昼食後の貴重な休憩を潰してまで、とある計画を立てる事になった、名前を出すのもウンザリな、アイツだ。

「アイツとは連んでないよ。私は誰とも連まないからね。それは君

「たちがよく知ってるだろ？」

真っ直ぐな目を向けるだけで説得力のある谷川の言葉に、まあ、そうだよな、と僕は西里に言う。

「じゃあ連んでないなら、なんでアイツと一緒に僕らに構うんだよ」

「決まってるだろ？面白いからだ」

さてと、教室に帰ろうか、と僕が立ち上がると、「あ、待って嘘、嘘」と谷川は僕の足元にしがみついていた。西里は寒々しい瞳でそれを見下す。

「嘘だからさ、ね、話し合おうよ。アイツの話しようよおお」

谷川は泣きつくが、どうせフリだ。

「ほんと、面倒くせーよな」

僕は渋々座った。

デカイ西里も座ると、楽しそうに谷川も座った。

言うまでもなく体育座りで。

つづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5423v/>

---

うたかた その2

2011年10月9日02時08分発行